

なめがた大使 小林光恵さん 書きおろしエッセイ  
**五感でキャッチ！なめがた漫遊記** 第9回

**紙の新聞が好き**

冬の平日。屋外からの自動車だの鳥のさえずりだのいつもの音が不思議と一切聞こえてこない昼下がりに。晴れ。

私は少し休憩を取ることにし、自宅の仕事机に座り、朝刊を読みはじめた。第2面を読むためにページをめくると、静かだから、空気抵抗を受けて振るえる新聞紙特有のかさかさひらひら音が大きく響き、そしてやんだ。そのとき、前に読んだ詩的な一文を思い出した。

「音は、それが消えようとするときにしか存在しない」※

たしか『詩と死をむすぶもの』（詩人の谷川俊太郎さんと医師の徳永進さんの往復書簡）という題の新書の中に出てきた気がするけど、どうだったかなあ……。探し出して確認してみたくなった。

しかしそれをやりだしたら、他の本も開いてみたりしてしまい、仕事の再開が大幅に遅くなるからやめた。

めくる音を楽しみながら新聞を読み進めて行くと、茨城版のページで、行方市が「さつまいも課」を発足した、という記事を発見。おっ、イモベーション！と喜んでいたら、まど・みちおさんの詩「おならはえらい」を思い出した。

た。おならは、出てきたときにきちんとあいさつをする、それも世界中の誰にもわかることばで。こんにちにはでもありさようならでもあるあいさつをする、といった内容だ。おならの音のことについて語っているのだ。ん？にこのことともとれるけど、音のほうだと思っけていいよね。と、さつまいも課の記事のそばに載っている別記事の女子高生の写真に話しかけた。

新聞をデジタル版で読む人が増えたそうですね。かさ張らなくていいでしょう。でも、私は断然紙派です。いろいろに二次利用できるだけじゃなく、その存在感も好き。未明の3時ごろ、配達にきてくれるバイクの音を聞くのも好きです。

※ウォルター・オングというアメリカの哲学者、文化史家の言葉のようです。



**小林 光恵さん**

子供のころは、学校に持って行くお弁当が新聞紙で包んであると、あまり嬉しくありませんでした。

行方市出身。つくば市二の宮在住。1980年代、20代だった私は、谷川俊太郎さんが詩を朗読するイベントに何度か行きました。多作な方なので、まだ読んでない作品がたくさんあります。

市公式ホームページ内で「行方帰省メシ」連載中。サイトはこちらから▶



**地域おこし**

**協力隊**

連載コラム⑨

地域おこし協力隊の田沼絢子です。1735日。着任した2020年7月1日から、退任する2025年3月31日までの日数です。

思い起こせば、着任した時期はコロナ禍真っただ中。活動が制限され、家族も友達もない慣れない生活は、大変なことたくさんありましたが、地域との関わり方など模索を続けながら、皆さんのおかげで活動することができました。ありがとうございます。

退任後も行方市に残り、協力隊として培ったさまざまな経験を生かして、今後も行方市を盛り上げていきたいと思っています。昨年末に霞ヶ浦沿いを散歩した時に、見ることができた富士山は大変美しく、改めて行方市の魅力を実感することができました。日々生活しているとなんとなく見逃しがちな景色も、改めて見るとまた違う気持ちになり、これからも行方市の魅力を発見し、積極的に発信していきたいと思っています。

また、鹿行地域の協力隊の仲間と一緒に設立したNPO法人鹿行地域おこ



▲田沼 絢子 隊員

【令和2年7月1日～現職】なめテレの普及活動や次世代情報発信を担当。鹿行地域おこし協力隊の連携にも力を入れている。

しLab. は、今後も活動の幅を積極的に広げていきたいと思っています。ご期待ください！

(次号は、佐藤晶が担当します。)



▲散歩をしている時に撮った美しい霞ヶ浦の景色

